

問題は医師不足。 根本的な解決のために…

医師の総数自体は減っていないにも関わらず、
なぜ地方からは、医師が減ってしまったのでしょうか。



かつての大病院は内科であれば、神経内科や腎臓内科・膠原病の内科や動脈硬化などの専門領域の医師が所属し、地方の病院に医師を派遣する余裕がありました。
ところが、研修医が研修先を選べる臨床研修制度が始まり、医師を送り出す余裕がなくなりました。
第2回の懇談会では、医師不足解消の解決策について話し合いました（詳細は広報石岡10月1日号参照）。

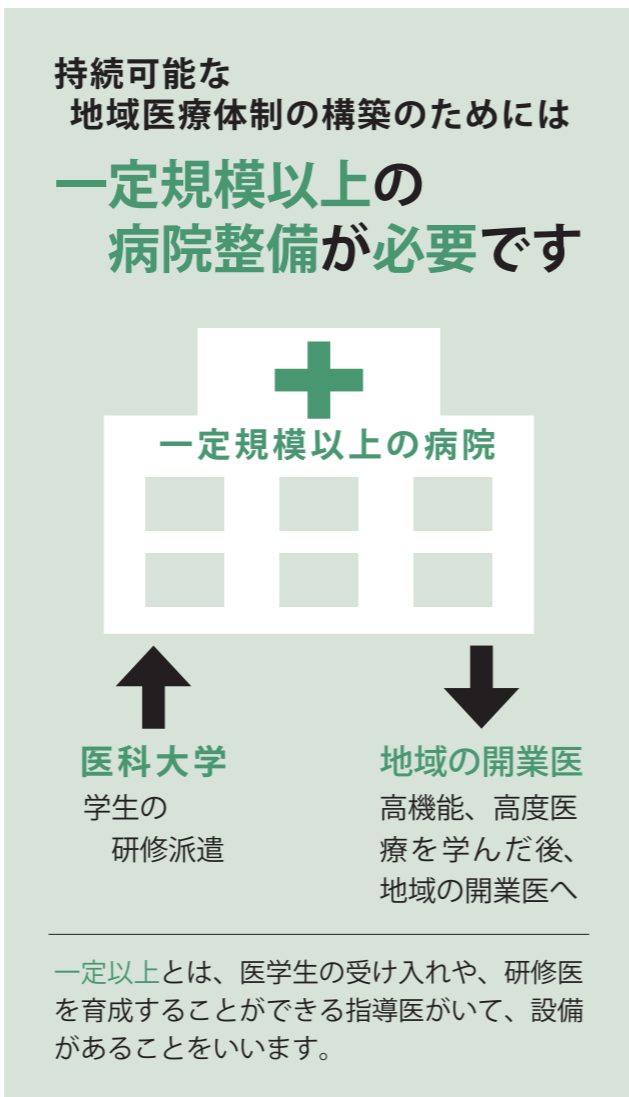
現在、医師の専門性と増えています。
以前は、内科と外科しかありませんでしたが、今は臓器別に細分化され、消化器内科の医師を目指すのであれば、内視鏡の症例を学ばなければなりません。
そのため医療技術を学べる環境があり、かつ指導できる医師のいる病院でないと医師を派遣してもらえなくなっています。

短期的な解決策（案）

- 1 医師確保等への補助金**
▶ 医師の確保、研修、労働環境改善の補助金を出す。
- 2 医療機関への財政支援**
▶ 救急や周産期医療など不採算医療を担う公的病院に、人員確保や施設整備などの補助を行う。

中・長期的な解決策（案）

- 3 医学生への修学資金貸与**
▶ 卒業後は市内病院で働くことを条件に医学生に修学資金を貸与する。
- 4 大学医学部への寄附講座**
▶ 小児科や周産期、救急などの研究を行う大学医学部に寄附し、研究活動の一環として地域に医師を派遣してもらうシステム。



地域医療が抱える課題

1 休日・夜間の緊急診療の限界

■ 石岡市医師会病院内で行う内科と小児科の休日夜間診療は、10人ほどの医師で対応していますが、医師の高齢化により限界がきています。

2 産科・小児科の医師不足

■ 小児科の診療を行う医療機関は石岡市で10件、かすみがうら市で4件、小美玉市で9件。
現在、市内で出産できる医療機関はゼロです。

3 平均年齢63歳。医師の高齢化

■ 市内39の病院が加入する石岡市医師会の平均年齢は63歳です。また医師だけでなく看護師や介護士なども非常に不足しています。

どこが問題？ 石岡の地域医療

「出産できる医療機関がない」
「救急を受け付けてくれる病院がない」
石岡の地域医療の一番の問題は、どこにあるのでしょうか？

茨城県の10万人あたり医師数は全国ワースト2位。そして石岡市内の医師数は91人です。
これは人口規模に照らし合わせると全国平均の半分以下。市内の医師は少人数で、石岡市はもとより、小美玉市・かすみがうら市などの住民を診ています。
9月、県では深刻な医師不足を解決すべく、産婦人科と小児科の医師を最優先で確保する病院を5つ選定。2年内の医師確保を目指し、動き出しました。その一つ、土浦協同病院は、土浦保健医療

圏（二次保健医療圏（以下二次医療圏）の中核病院です。県ではこの二次医療圏を中心に、地域医療の計画策定を進めています。
石岡市は、土浦の二次医療圏内に位置し、平成29年に456件あったお産のうち150件は土浦協同病院で行われており、石岡の医療は二次医療圏に依存しています。
しかし二次医療圏は、あくまで一次医療圏（市内の医療機関）で治療・対応できないという時のためのもの。そして市内の医療環境に目を向けると、10年で5軒の医院

が廃業するなど、厳しい状況が続いています。
市民を交えた話し合いを進めています
今後、新たに開業したり、市内で働いてくれる医師を呼ぶにはどうしたらいいのか。
6月に今泉市長が座長となり、市民と医師会、小美玉市、かすみがうら市の市長・議長を交えた医療懇談会を立ち上げました。10月末までに3回の懇談会を行い、地域医療の課題について話し合ってきました（詳細は広報石岡9月15日号参照）。

住民同士で支えあう生活サポーター制度
「上の子を病院に連れて行く3時間だけ、下の子を見てほしい」「病院への通院手段がない」という時に、市社会福祉協議会の行う在宅福祉サービスを利用し、生活サポーターにお手伝いしてもらうことができます。
事前登録制で利用料がかかるほか、医療機関への送迎などのサービスを受けるには条件があります。
生活サポーターとは有償ボランティアの住民が行い、この制度は暮らしの中の「困った」をお互いの善意と協力で解決するものです。しかし現在、生活サポーターが足りていません。
あなたの力を貸してください。
石岡市社会福祉協議会
☎ 22・3045